

## 未知の食べ物への言及の仕方：試食会における同定と共感

著者	ザトラウスキー ポリー
雑誌名	国立国語研究所論集
号	11
ページ	93-115
発行年	2016-07
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000843">http://doi.org/10.15084/00000843</a>

## 未知の食べ物への言及の仕方

### ——試食会における同定と共感——

ポリリー・ザトラウスキー

ミネソタ大学／国立国語研究所 外来研究員 [-2011.08]

#### 要旨

本研究では、日本語の話者は試食会で食べている物を同定 (identify) したり、評価したりする際、未知の食べ物にどのように言及するかを考察する。「言及表現」は、食べ物、飲み物の名前の候補やその特質を表す表現とし、南 (1974, 1993, 1997) の述語的部分の要素 (動詞, 名詞 (+ダ), 形容詞, 形容動詞) と述語的部分以外の成分 (Nハ (提題), Nガ (主語) など, Nニ, Nヲ, N+他格助詞) を含む。資料は、性 (FFF, FFM, FMM, MMM) と年齢 (30歳未満と30歳以上) で組み合わせた、3人の友人同士からなる試食会のビデオコーパス (総数は13) (ザトラウスキー 2011, 2013, 2014c, d, 2015a, b, Szatrowski 2014a, b) である。分析では、日本語による試食会で食べ物を同定／評価する際、1) 未知の食べ物に言及するのどのような表現が用いられるか、2) 未知の食べ物に言及する言及表現はほかの参加者にどのように受け入れられるか受け入れられないか、3) またその言及表現の交渉は人間関係にどのように影響を与えるかという3つの観点から考察する。分析結果として未知の食べ物について話している際、明確な言及表現のほかに、省略したり、手や人差し指で指す指示的な身ぶり等の非言語行動によって言及することが見られた。言語による言及表現は、「これ」「こっち」の指示代名詞、「この+N (名詞)」のような言語形式のほかに、具体的な内容を表す表現があった。参加者同士が相手の言及表現に対し、相づちを打ったり、同じ言及表現かそれに類似した言及表現を用いたりして同意を示すことで相手の言及表現を受け入れた。類似した言及表現を用いる際、未知の食べ物は何であるかの同定のほかに、特に笑いを伴う場合、言葉遊びで共感し、親近感が増すことも観察された。本研究により述語的部分の要素や複数の参加者の発話を含めて考察することで従来の「指示表現 (referring expression)」の研究が深まったと考えられる\*。

**キーワード:** 言及表現, 未知の食べ物, 同意, 同定, 感覚的体験

#### 1. はじめに

本研究では、日本語の話者は試食会で食べている物を同定 (identify) <sup>1</sup> したり、評価したりする際、未知の食べ物にどのように言及するかを考察する。資料は、性 (FFF, FFM, FMM, MMM) と年齢 (30歳未満と30歳以上) で組み合わせた、3人の友人同士からなる試食会のビデオコーパス (総数は13) (ザトラウスキー 2011, 2013, 2014c, d, 2015a, b, Szatrowski 2014a, b) である。その内の30歳未満の女性3人による試食会 (JPN3) を用いる。試食会は、日本料理、セ

\* お茶の水女子大学の高崎みどり理事・副学長、古瀬奈津子教授、香西みどり教授、十文字学園女子大学の星野裕子講師に色々お世話になり、感謝申し上げます。また、資料収集、資料作成等にご協力いただいた山田さおり氏、原田彩氏、秋山雅一氏に感謝いたします。試食会の参加者にもお礼申し上げます。本研究は2009～2011年度のミネソタ大学の科学研究費補助金と2012～2013年の博報財団第7回「日本語海外研究者招聘事業」による招聘研究の成果の一部である。

<sup>1</sup> 「同定」とは、食べたり、飲んだりしている物についてそれが何か、どのようなか (味、匂い、舌触り、見た目等) を認定する行為である。

ネガル料理, アメリカの料理の3コースを食べながらそれについて話したり, 評価したりする会話である<sup>2</sup>。特にアメリカ料理のコースで出された犬の形をした未知の食べ物について話している話段<sup>3</sup>を取り上げる。

「言及表現」は, 食べ物, 飲み物の名前の候補やその特質を表す表現とし, 南 (1974, 1993, 1997) の述語的部分の要素 (動詞, 名詞 (+ダ), 形容詞, 形容動詞) と述語的部分以外の成分 (Nハ (提題), Nガ (主語) など, Nニ, Nヲ, N + 他格助詞) を含む<sup>4</sup>。述語的部分の要素や複数の参加者の発話を含めて考察するのは従来の「指示表現 (referring expression)」の研究と異なる (Clancy 1980, Downing 1980, Hinds 1983, 1984, 渡辺 2009, Watanabe 2010, その他)。

分析では, 日本語による試食会で食べ物を同定/評価する際, 1) 未知の食べ物に言及するにはどのような表現が用いられるか, 2) 未知の食べ物に言及する言及表現はほかの参加者にはどのように受け入れられるか受け入れられないか, 3) またその言及表現は人間関係にどのように影響を与えるかという3つの観点から考察する。

## 2. 先行研究

### 2.1 知識と言語に関する研究

従来の研究では, 参加者 A には知られているが, 参加者 B には知られていない A-event (A の出来事) と参加者 B には知られているが, 参加者 A には知られていない B-event (B の出来事) (Labov & Fanshel 1977), 情報が話し手の縄張りに属しているか聞き手の縄張りに属しているかという縄張り理論 (神尾 1990), ある情報に対して知識がより多い (+K) か少ないか (-K) (Heritage 2012, Koike 2014, その他) に焦点が置かれてきた。本研究は参加者 3 人にとって未知の食べ物, つまりすべての参加者が知らない食べ物に関する会話を考察する。

### 2.2 南 (1974, 1993, 1997) の文の階層構造モデル

分析に際して, 言及表現は文の構造のどの位置で用いられるかを考察する。そのために表 1 に示す南 (1974, 1993, 1997) の文の階層構造モデルを援用した。

南 (1974, 1993, 1997) は文の構造を述語的部分の要素と述語的部分以外の成分とに分ける。そして, 実際の談話を元に, 縦に書いてある従属句において横の要素と成分がそれぞれ生起可能な場合には+, 可能ではない場合には-によって印し, 要素と成分の可能性によって A ~ C の 3 段階を設けている。

<sup>2</sup> 資料は, 食べ物に関する研究のために無料で昼食を食べ, 感想を述べてもらう参加者を募集し, 収集した。「世界の国々の本格的な料理を少しずつ食べながら, その食べ物, 味等をどう思うか話していただく」ため, 参加者 (友人と 3 人で) を試食会に招待した。どこの料理か, 食べ物や飲み物は何かについては前もって教えていない。

<sup>3</sup> 「話段」とは, 参加者相互が協力し合って, 各自のコミュニケーションの目的を達成しようとする過程で生じ, 談話の参加者の目的による話題, 発話機能, 音声面の特徴から認定される動的な単位である (ザトラウスキー 1991, 1993)。文章・談話における「段」については佐久間 (2003) 参照。

<sup>4</sup> N = 名詞。本資料では述語的部分以外の成分には名詞 + Z (無助詞) も含む。

表1 南の文の階層構造モデル(南 1993: 96-97)<sup>5</sup>

構成要素	述語的部分以外の成分										述語的部分の要素										
	C類従属句	タプン・マサカの類	ハ(提題)	B類従属句	評価の意味の修飾語	ジツニ、トニカク、ヤハリの類	時の修飾語	場所の修飾語	ガ(主格)など	A類従属句	程度副詞	状態副詞	名詞+他格助詞	ニ	ラ	動詞	授受の形	尊敬の形	マ	ナイ	マイ、ダロウ、ウ・ヨウ
従属句																					
A～ナガラ<平行継続>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-
～ツツ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-
～テ <sub>1</sub>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-
連用形反復	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(+)	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-
B～テ <sub>2</sub>	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-
～ト	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-
～ナガラ<逆接>	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-
～ノデ	-	-	(+)	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-
～ノニ	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-
～バ	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-
～タラ	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-
～ナラ	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-
～テ <sub>3</sub>	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-
～連用形	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
～ズ(ズニ)	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	(+)	-	-	-
～ナイデ	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
C～ガ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
～カラ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
～ケレド	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
～シ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
～テ <sub>4</sub>	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-

2.3 食べ物についての日本語による会話の分析

食べ物についての日本語による会話の分析には、テレビの料理番組に見られる言語・非言語行動による評価表現 (ザトラウスキー 2010b), 30歳未満の女性による試食会の言語・非言語行動 (ザトラウスキー 2011), 日米の試食会の相互作用におけるモダリティとエビデンシャリティ

<sup>5</sup> 表1の下のA, B, Cの線は筆者による。なお、南の表の「テ<sub>1</sub>～テ<sub>4</sub>」についての説明は割愛した。

(Szatrowski 2014a, ザトラウスキー 2014d, 2015b), 食べ物を評価する際に用いられる「客観的表現」と「主観的表現」(ザトラウスキー 2013), 試食会における食べ物と家族との関係 (ザトラウスキー 2014c), 試食会におけるオノマトペ (ザトラウスキー 2015a) 等がある。また, 食事に呼ばれてから食事し終わって帰るまでの過程の段階を示す挨拶と決まり言葉 (pragmemic trigger) (Beeman 2014), お寿司を注文したり, 出したりする構造的組織 (structural organization) (Kuroshima 2014), 日本人がポットラックパーティーでどのように食べ物を描写するか (Noda 2014), 食べ物とレストランに関するストーリーのオチ (punch line) の繰り返し (Karatsu 2014), 子供の, 食べ物を通しての感情と人間関係の社会化 (Burdelski 2014) 等に関する研究もある。

Koike (2014) はある食べ物について知識がより多い話者とより少ない話者の会話を考察し, 参加者が食べ物の範疇を用いて, 別の食べ物との類似点で比較したり, 相違点で対照したりすることによって共通理解を得ようとすることを解明した。本研究の資料では, 参加者全員が知らない食べ物を食べていることが特徴的であり, 色々な観点からその食べ物の特質に言及して, その食べ物を同定／評価しようとすることで, Koike (2014) と類似した過程で共通理解を得ようとする。そのほか, 相手が用いている言及表現を用いないことでそれとなく共感しないことを示したり, 相手の言及表現を用いることで親近感が増したりすることも見られる。

### 3. 分析

試食会は, 20代の女性3人 (g, h, i) が日本, セネガル, アメリカの料理からなる3つのコースを食べながら食べ物や飲み物について話したり, 評価したりする会話 (JPN3) である (54分の長さ)。どこの料理か, 食べ物や飲み物は何かについては前もって教えていない。3人の女性はカメラから見て左から g, h, i の順で座っている。アメリカ料理のコースは, 図1の下から時計回りに, 碗の中のサラダ, マカロニとチーズ, チョコレートケーキ, 犬の形をしたリコリスのグミである。今回の分析は特に図2に示す犬のグミが中心となる。



図1 アメリカ料理のコース



図2 犬の形をしたリコリスのグミ

本研究では、従来の研究を踏まえ、まず、ある未知の食べ物に言及する言及表現を、見た目（形、質、色）、味、食感・歯応え、匂いという4つの観点に分類した。次に、それぞれの観点で参加者が用いている言及表現を会話の流れの中で観察し、参加者別に数え、全体的な異同を確認した。さらに、その際、形、質、色に関する言及表現を南（1974, 1993, 1997）の述語的部分の要素（動詞、名詞（+ダ）、形容詞、形容動詞）と述語的部分以外の成分（Nハ（提題）、Nガ（主語）など、Nニ、Nヲ、N + 他格助詞）に分けて示した。また、相互作用の中である言及表現を用いる場合と用いない場合とがあるが、未知の食べ物の同定と参加者間の共感に対してどのように影響があるのかを考察した。

### 3.1 分析結果

未知の食べ物について話している際、言語による言及表現のほかに、省略したり、手や人差し指で指す指示的な身ぶり等の非言語行動によって言及することがある<sup>6</sup>。言語表現が明確な言及表現の場合、「これ」「こっち」の指示代名詞、「この+N（名詞）」の連体詞と名詞のような言語形式のほかに、具体的な内容を表す表現がある。見た目（形、質、色）、味、食感・歯応え、匂いという4つの観点を表す言及表現が会話の流れの中で参加者によってどのように変化するかを表2（次頁）に示す。

表2は未知の食べ物に対する言及表現の会話の流れにおける変化を示している。見た目に関しては形、色、質に関する言及表現があった。形に関しては参加者gが「犬の形」、「犬」で何度も言及するが、それに対してhとiは「ほんとだ」という相づちを打ち、iはさらに「犬」を1回繰り返すことで3人とも犬の形について同意している<sup>7</sup>。表2に2つ目の「見た目」の行があるが、hとiはそれぞれ1回「犬」で言及している。色はhが「黒」、「深緑」で言及するが、gは緑を打ち消す。次に、gが「普通にチョコの色」で言及するのに対してiは「普通」を打ち消し、その後hは「黒々」と言うように色に関して意見が食い違っている。質に関しては、gは「この犬肉」、「狗肉クッキー」と言及するのに対して、hは「狗肉」を繰り返すが、iは「犬の肉」を用い、「狗肉」という表現は試食会で一度も用いてない。匂いに関しては、gが「予想外の匂い」、「薬膳」と言及するのに対して、hが「病院の匂い」、「薬箱の中にある」と展開させる。hはgの表現を繰り返していないが、類似した表現を用いることでgの言及表現を受け入れたと言えよう。また、iはgの「薬膳」に対して「あほんとだ」という相づちによって同意している<sup>8</sup>。このように会話の流れにおいて3人で言及表現を交渉し合い、相手の表現を繰り返したり、類似した表現を用いたり、相づちで同意したりすることで受け入れる一方、その表現を用いなかったり、打ち消したり、反対の表現を用いたりすることで受け入れないことも見られた。

<sup>6</sup> 指示的な身ぶりについてはザトラウスキー（2005b, 2006, 2010a, 2012）参照。

<sup>7</sup> 表2では相づちは記載していない。詳しくは3.2の①「42g-64g（32:17-32:47）「リコリスの見た目（形）の話段」」参照。

<sup>8</sup> 表2では相づちは記載していない。

表2 未知の食べ物に対する言及表現の会話の流れにおける変化<sup>9</sup>

観点	
見た目	<b>形</b> g:犬の形→犬の形→犬→犬犬→i:犬→g:犬→犬犬
	<b>色</b> h:黒く→深緑→g:緑× <sup>10</sup> →普通にチョコの色→i:普通×→h:黒々
	<b>質</b> g:この犬→肉→h: <b>味</b> 甘くない→ <b>質</b> 犬の肉→g:狗肉クッキー→i:犬の肉→h:狗肉
食感	g:グミ→狗肉グミ→h: <b>質</b> チョコ→ <b>食感</b> 変な弾力→g:弾力ある, この狗肉→h: <b>質</b> 狗肉
見た目	<b>形</b> h:犬→i:犬
食感	g:グミ→グミ
匂い	g:予想外の匂い, このグミ→h: <b>味</b> 味→i:おいしくない→g: <b>匂い</b> 薬膳→匂い→予想外の匂い→h:病院の匂い→g:薬膳→h:薬箱の中にある→湿布×
味	h:お土産とかで買ってきてた人にお, あのおもしろがれて食べさせられそうな味→売れなさそう→やばい→ <b>歯応え</b> きつい→g: <b>味</b> 平気→i:平気→きつい→g:平気→変な味→h: <b>歯応え</b> 歯に付いて取れない→i:取れない
質	g:狗肉→h:日本のグミ×→ <b>歯応え</b> 歯に付く→g:ちょっといい→i:歯に付く→g: <b>匂い</b> 漢方→ <b>質</b> ハーブ→この狗肉→h:この狗肉→ <b>味</b> 地獄→g: <b>歯応え</b> 歯から取れね→ <b>質</b> 狗肉→h:狗肉→g: <b>味</b> すごいまずい狗肉→ <b>質</b> 狗肉→この狗肉, <b>味</b> 平気
食感	g:狗肉の食感→出来の悪いハイチュウ→取れない→狗肉取れない→h:箸→g:箸
味	h:狗肉→i:味, 平気→g:味, 平気→ <b>歯応え</b> 取れない→h: <b>味</b> 一個でいい→もういい, この狗肉→g: <b>質</b> このく→このクッキー→h: <b>味</b> 狗肉, いいです→g: <b>質</b> 狗肉→h: <b>歯応え</b> 水→g: <b>質</b> 狗肉→h:格闘中→i: <b>味</b> 味, 平気→g:味, 割といい→普通
歯応え (取る道具)	g:食感→i:歯に付く→g:一番虫歯が多い国の食べ物→h:頑張れ→i:歯に付く→g:フォーク→箸→i:フォーク→g:フォーク→i:水→g:気合い→h:舌→g: <b>質</b> 凶器→i: <b>歯応え</b> 頑張る→歯に付いてる→h:頑張れ→g:水→水水→i:舌, 頑張る

表2 でばらばらに導入される見た目(形, 質, 色), 匂い, 味, 食感・歯応えという4つの観点を表す言及表現を整理し, 用いられた数を参加者別で示したのが表3である。表の下の参加者別の合計ではg, h, iの内gが用いた言及表現の数が一番多く, hが次に多く, iが一番少なかった。表の右端の列(言及表現別の合計)では「狗肉」という表現の数が一番多く(19), 「犬」が次に多かった(12)。これらの表現はiはほとんど用いておらず, hは「狗肉」を用いるが, 「犬」は1回のみであり, gは両方多く用いている。

<sup>9</sup> 表2と表3の「頑張れ」, 「頑張る」, 「気合い」, 「格闘中」や歯からリコリスを取る道具等(「フォーク」, 「箸」, 「水」, 「舌」)はリコリスに対する言及表現ではないが, 多く用いられており, 会話の流れを理解するのに役立つため, 表に示した。

<sup>10</sup> 「緑×」等は「緑」を打ち消す表現を表す。

表3 4つの観点を表す言及表現とその参加者別の数

観点	言及表現	g	h	i	合計	
見 た 目	形／質	犬・犬の形・この犬	6・2・1	1・0・0	2・0・0	12
		狗肉・この狗肉・狗肉クッキー	8・3・1	5・2・0	0	19
		このく・このクッキー	1・1	0	0	2
		犬の肉・肉	0・1	1・0	1・0	3
		チョコ・ハーブ・凶器	0・1・1	1・0・0	0	3
	色	黒く・黒々	0	1・1	0	2
		深緑	0	1	0	1
		チョコの色	1	0	0	1
	匂 い	匂い	予想外の匂い	2	0	0
薬膳・漢方			2・1	0	0	3
病院の匂い・薬箱の中にある			0	1・1	0	2
味	味	甘くない・おいしくない・変な味・すっごいまずい 狗肉	0・0・1・1	1・0・0・0	0・1・0・0	4
		一個でいい・もういい・いいです	0	1・1・1	0	3
		お土産とかで買ってきてた人にお,あのおもしろ ろがれて食べさせられそうな味・売れなさそ う・地獄	0	1・1・1	0	3
		きつい・やばい	0	1・1	0・1	3
		平気・割といい・普通	4・1・1	0	3・0・0	9
		グミ・このグミ・狗肉グミ	3・1・1	1・0・0	0	6
		食 感・ 歯 応 え	食感	変な弾力・弾力ある	0・1	1・0
歯に付く(付いて)	0			2	4	6
歯 応 え (取る道具)	取れない・歯から取れねー		3・1	1・0	1・0	6
	ちょっといい・きつい		1・0	0・1	0	2
	出来の悪いハイチュウ・一番虫歯が多い国の食 べ物		1・1	0	0	2
	頑張れ・頑張る・格闘中・気合い		0・0・0・1	2・0・1・0	0・2・0・0	6
	水・箸・フォーク・舌		3・2・2・0	1・1・0・1	1・0・1・1	13
合計		61	36	18	115	

表4に見た目(形, 質)に関する発話の流れをまとめた。表の左の欄には、発話中の言及表現が述語的部分以外の成分の場合、N+Z(無助詞), Nヲ, Nニ, Nカラ, Nテ, Nガ, Nハ等での成分かを示している。真中の欄に発話番号と参加者のアルファベット, 右の欄に具体的な発話を示している。発話中の言及表現は四角で囲み, 指示代名詞や連体詞は太文字で記す<sup>11</sup>。表4の左の欄を見ると, 言及表現が述語的部分以外の成分として用いられている場合, 初めは無助詞か南(1974, 1993, 1997)のA段階の成分(Nヲ, Nニ等)が多く, 後になるとB段階(Nガ)とC段階(Nハ)が見られる。

<sup>11</sup> 文字化資料の表記方法については稿末参照。



表4 見た目(形, 質)に関する発話の流れ

N+Z	42g	(1.3)ね、ね、 <u>犬の形</u> してない、※リコリスを見る
Nヲ	58g	(1.7)ってことで <u>犬の@形</u> をしてると思うんだけど。@ ※リコリスを近くで見る
	59g	<u>犬</u> っ// <sub>1</sub> ぼくない? <u>犬犬</u> 。 <sub>1</sub>
	61i	// <sub>2</sub> あほんと <sub>1</sub>   だ、 <u>犬</u> だ <sub>2</sub>   ー。
	62g~	<u>犬</u> だよね// <u>これ</u> 。
	64g	<u>犬犬</u> ー。
N+Z	270g	(2.1) <u>この犬</u> 食べたら=
	271g	<u>肉</u> なんじゃないの?
	278h	(2.2)てか、え? <u>犬の肉</u> ? ※右指2でリコリスを指す
	283g	<u>狗肉クッキー</u> みたいな。 # 狗肉(くにく) = 犬の肉
Nニ	320i	じゃあgggg <sup>12</sup> さん <u>犬の肉</u> に早く。
N+Z	323h	(1.3) <u>狗肉</u> さあ、
N+Z	326g	<u>狗肉</u> <u>グミ</u> なの?
Nニ	328h	<u>チョコ</u> にしてはさあ=
N+Z	331g~	@なんか <u>弾力</u> あるね <u>この狗肉</u> 。@
	333h~	もう <u>狗肉</u> 扱い@じゃん <u>これ</u> 。@// フッフツ
N+Z	338h	<u>犬</u> い、食います。
N+Z	339i	(1.1)あ、二人 <u>犬</u> 食ってんの?
	400g	// <u>狗肉</u> =
Nトカ	420g	(1.2)ヨーロッパだって <u>ハーブ</u> とかあるじゃん。
N+Z	422g	でもたぶん全然関係ないと思う@けどな <u>この狗肉</u> 。@
N+Z	426h	//@ <u>この狗肉</u> 残  しといたら=
N+Z	436g	<u>狗肉</u> 食べきるか。
	472h	@く、 <u>狗肉</u> 効果? @ ハッ  ※左指2でリコリスを指す
Nヲ	495g	だから <u>す</u> っごいまずい <u>狗肉</u> を食べてから=
Nカラ	504g	私は <u>狗肉</u> から帰って@これない。@
N+Z	516g	(2.4)あたしでも <u>この狗肉</u> 別に平気だなあ。
Nテ	519g	(8.2)しかしなんか <u>狗肉</u> の食感でさ、
Nガ	542g	<u>狗肉</u> が取れない@ちょっちょつと。@
Nニ	552h	iiiも <u>狗肉</u> に、 ハハ、ハハ
Nハ	561h~	も、もういいかな <u>この//狗肉</u>   は。
N+Z	563g	あたし <u>このく</u> 、 <u>これ</u> どこの国のか= ※右指2でプレートを指す
	564g	わかったら=
N+Z	565g~	土産で買@ってこようか//な <u>このク</u>    <u>ッキー</u> 。@
Nヲ	572h	@ <u>狗肉</u> を堪能//した  と思うから、@ ※首を横に振る
	575g	あれもう <u>狗肉</u> なの?
	576g	確定@なの? @
	585g	//さす  が <u>狗肉</u> 。
	806g	(1.3)あでも <u>このデザート</u> <u>凶器</u> だよな。

この節では、表2で言及表現の全体の流れ、表3でそれぞれの参加者がどの言及表現を用いるか、またほかの参加者が導入したのものを用いるかどうかを見てきたが、3.2で相互作用の中で具体的にどのように相手の言及表現を扱うかを見た上で、4.で「未知の食べ物の言及表現を受け入れる過程」を提示する。また、表4でまとめた言及表現の文の構造の中の成分が3.2の相互作用の中でどのように用いられるかを考察することで、4.で示す「未知の食べ物に対する言及表現の

<sup>12</sup> gggg は g の 4 モーラからなる名前を表している。

文構造における位置の展開モデル」へとつながっていく。

### 3.2 相互作用における言及表現の用い方

ここで【JPN3】のリコリスという未知の食べ物に対する言及表現は相互作用の中でどのように用いられているかを考察する。【JPN3】のリコリスについての会話資料を表5にまとめた<sup>13</sup>。12の話段にまたがるが、最初の①～③の話段では見た目（形，色，質）について話している。④でgとhがリコリスを食べるが、その後食感，匂い，味等様々の観点から話が展開していく。iは⑩で初めてリコリスを食べる。字数が限られているため，本稿では「犬」「狗肉」が用いられる①③④⑨⑩の話段を中心に取り上げ，考察する。また，対照のために②の話段とその後の一部で既知の食べ物（トマト）について話しているところも少し取り上げる。

表5 JPN3のリコリスについての会話資料の全体構造

① 42g-64g	(32:17-32:47) リコリスの見た目（形）の話段 <49z-57z 研究者の指示, 63i ケーキ>
② 65h-82h	(32:48-33:07) リコリスの見た目（色）の話段 <66i-68i（サラダの）トマト>
③ 267h-285g	(38:06-39:14) リコリスの見た目（形，質），味（275h-277h），同定（283g）の話段
④ 319g-346g	(40:42-41:19) リコリスの食感，同定（333h）の話段 <321g-332g, 337i, 344i ケーキ>
⑤ 347g-367i	(40:42-41:19) リコリスの匂い，味（352h-353i）の話段
⑥ 368g-393h	(41:20-41:50) リコリスの味（377h 歯応え）の話段
⑦ 394h-413i	(41:51-42:28) リコリスの質，歯応え，匂い（415g）の話段
⑧ 414g-422g	(42:29-43:23) リコリスの匂い，質の話段
⑨ <423i-515g	(43:24-45:27) リコリスを食べた後のケーキの味の話段>
⑩ 516g-611i	(45:28-48:09) リコリスの歯応え，味（516g, 554i-557g, 560h-561h），同定（575g-579g） の話段 <529h-539h, 607i-611i ケーキ>
⑪ 628i-651h	(48:57-49:36) リコリスの歯応えの話段
⑫ 806g-818i	(54:14-54:29) リコリスの歯応えの話段

まず，①「リコリスの見た目（形）の話段」は，49z-57zでの研究者の指示，63iでケーキについての話もあるが，参加者はリコリスに初めて言及する。言及表現は四角で囲んで示す。

<sup>13</sup> 表5には「リコリスの見た目（形）」のように見た目の下位分類（形，質，色）を（ ）内に示す。また，話段の一部が主の話題と異なる場合にはその話題の後に関連する発話を（ ）内に示す。例えば③の「リコリスの見た目（形，質），味（275h-277h）」の話段は，見た目のうち形と質が主の話題であるが，275h-277hでは味についても言及している。さらに，リコリス以外の話は「<66i-68i（サラダの）トマト>」のように<>内で示す。

① 42g-64g (32:17-32:47) 「リコリスの見た目 (形) の話段」<sup>14</sup>

発話番号		g	h	i
42	g	(1.3)ね、ね、 <u>犬の形</u> してない、 ※g:リコリスを見る		
43	h		※h: 乗り出してgの皿を見る	
44	g~	って言っても =		
45	g	まだ来てないん@だよ二人、@ #コース3がまだ来ていない		
46	i			{フツ}
47	g	@ね、ねって言っても。@		
48	i			{フツ}
...				
58	g	(1.7)ってことで <u>犬の@形</u> をしてみると思うんだけど。@ ※g:リコリスを近くで見る	※h:リコリスを近くで見る	※i:リコリスを近くで見る
59	g	<u>犬</u> っ// <sub>1</sub> ほくない? <u>犬犬</u> 。 <sub>1</sub>		
60	h		// <sub>1</sub> あーあー// <sub>2</sub> あー、 <sub>1</sub>   ほんとだ。 <sub>2</sub>	
61	i			// <sub>2</sub> あほんと <sub>1</sub>    だ、 <u>犬</u> だ <sub>2</sub>   ー。
62	g~	<u>犬</u> だよね// <sub>3</sub> これ。 <sub>3</sub>		
63	i			// <sub>3</sub> これデ <sub>3</sub>   ザート? ケーキ?おいしそう。
64	g	<u>犬犬</u> ー。		

アメリカ料理のコースがまず g の前に運ばれる。g がそれを見て 42g 「ね、ね、犬の形してない、」で初めてリコリスに言及する。しかし、h は乗り出して g の皿を見るが、h と i はまだもらっていないため、言葉では反応なしで終わってしまう。次に、h と i のところにアメリカ料理のコースが運ばれた後、g が 58g 「ってことで犬の@形をしてみると思うんだけど。@」で笑いながら再びリコリスに言及する。この時点で g, h, i 全員がリコリスを近くで見ていることで何について話しているかが分かるはずである。そこで 59g 「犬っ //<sub>1</sub>ほくない?犬犬。<sub>1</sub>||」の同意要求に重なって、60h で h が相づちにより、61i で i が相づちと「犬だー」と g の言及表現を繰り返すことで同意している。その後、g がさらに「犬」を 3 回繰り返す、念押しする。このように参加者は全員リコリスが犬の形をしていることに同意している。

次に②「見た目 (色) の話段」は詳しく考察しないが、66i-68i では既知のトマトについての発話があるため未知の食べ物と対照するために取り上げる。

<sup>14</sup> 「① 42g-64g (32:17-32:47) リコリスの見た目 (形) の話段」のようにそれぞれの話段のタイトルでは①は話段の番号、42g-64g は話段の始まりと終わりの発話番号と参加者の文字 (g), (32:17-32:47) は会話の始まりと終わりの時間、「見た目 (形)」は食べ物をどの観点から話しているかを示す。

② 65h-82h (32:48-33:07) 「リコリスの見た目(色)の話段」 <66i-68i (サラダの) トマト>

発話番号	g	h	i
65	h	なんか// <sub>1</sub> さあ、 <sub>1</sub>	
66	i		// <sub>1</sub> これ <sub>1</sub>   ねー＝
67	g	ん？	
68	i		あたしの// <sub>2</sub> 嫌いな <sub>2</sub> トマト <sub>2</sub>   さー、
69	h	// <sub>2</sub> い、色が <sub>2</sub> 、 <sub>2</sub>	
70	g	// <sub>3</sub> 何の？ <sub>3</sub>	
71	h	// <sub>3</sub> 色がさ <sub>3</sub>   ー、	
72	h	(1.0)なんか黒くない？ ※h: 右指2でリコリス？を指す	
73	h	あ、光のせい関、係かなあ。	

g と h がリコリスについて話している間、i はサラダの中のトマトに言及している。65h, 69h, 71h ~ 73h で h がリコリスの名前を言わずに人差し指でリコリスを指しながら、リコリスの色は何かについて話している。一方、i は 68i 「あたしの // 嫌いなトマトが || さー、」で明確な言語表現によってトマトに言及している。未知の物とは異なり、最初から知っている名称で、述語的部分の要素としてではなく、南 (1974, 1993, 1997) の B 段階の「N ガ」(の述語的部分以外の成分) を用いている。

その後、アメリカ料理のマカロニとチーズについての話があって、次に①「サラダについての話段」が続く。アメリカ料理のコースを正式に始めてからまた既知のトマトに言及するところがあるので、取り上げる。

① 93h-266g (33:20-38:05) 「サラダについての話段」

発話番号	g	h	i
93	h	いただく// <sub>1</sub> きます <sub>1</sub>    ※h: 両手の平を合わせる	
94	i		// <sub>1</sub> いただきます <sub>1</sub>   す。
95	g	いただく// <sub>2</sub> きます <sub>2</sub>	
96	i		// <sub>2</sub> あたしの <sub>2</sub> 嫌いな <sub>2</sub> トマト がさあ、
97	i		たくさんあるのがさあ、
98	i		// <sub>3</sub> ちょっとさあ、 <sub>3</sub>
99	g	// <sub>3</sub> トマト <sub>3</sub> おいしい <sub>3</sub>   じゃない。	
100	i		でも、あっちのトマトはおいしかった。
101	i		(2.5)うん。

96i 「// あたしの || 嫌いなトマトがさあ、」で i がまた既知のトマトを皆が知っている名称(「N ガ」の成分)で、次に 99g 「// トマトおいしい || じゃない。」で g が同じ名称(「N+Z」の成分)で、100i 「でも、あっちのトマトはおいしかった。」で i も同じ名称(「N ハ」の成分)で言及している。このように既知の食べ物の場合、言及表現についての交渉は見られず同じ名称で述語的部分以外の成分で言及することが観察される。

「サラダについての話段」の後、③「リコリスの見た目（形、質）」の話段が続く。283gで「狗肉」という言及表現が初めて用いられる。犬の形をしたリコリスを「狗肉」という表現で言及するが実におもしろい表現である。羊頭狗肉と類似し、見た目は可愛くて、犬の形をしたチョコレートに見えるが、匂いを嗅ぐと薬膳臭く、実際に食べてみると歯に付いて取れない食べ物である<sup>15</sup>。

③ 267h-285g (38:06-39:14) 「リコリスの見た目（形、質）、味（275h-277h）、同定（283g）の話段」

発話番号		g	h	i
267	h		(38.0)このメニューさあ、	
268	g	//ん?		
269	h		//蛋  白質があんまりないのかな。	
270	g	(2.1)この犬食べたら=		
271	g	肉なんじゃないの?		
272	h		{フフ}え。	
273	g	まさかの。		
274	i			{フフ}
275	h		(1.0)あれっ? {フフフフ} ※h:左手で何かを食べる動作	
276	g	{フフ}		
277	h		甘くない。	
278	h		(2.2)てか、え? 犬の肉? ※h:右指2でリコリスを指す	
279	i			{フッ}
280	g	{フフフ}		
281	h		{ハッ、ハハハ}	
282	i			@いや、いや、@
283	g	狗肉クッキーみたいな。 #狗肉(くにく)=犬の肉		
284	h		(3.2)ちょ、シュール@だなあ。@	
285	g	{フフフフ}		

③の初めにhはアメリカ料理に蛋白質があまりないという感想を述べる。その後、270g「この犬食べたら=」と271g「肉なんじゃないの?」でgが①で全員が同意した「犬」という言及表現を(述語的部分以外の成分(N+Z))で用い、hの感想から発想を得てリコリスは蛋白質になる肉という提案を出している。それに対して全員が笑う。次に278hでhが人差し指でリコリスを指しながらただの肉ではなく、犬の肉と尋ねる。さらに全員が笑ってから、iが笑いながら282i「@いや、いや、@」で否定している。そこで283g「狗肉クッキーみたいな。」でgが初めて狗肉という言葉及表現を述語的部分の要素で用いる。そして3.2秒の沈黙の後、hが284h「ちょ、シュール@だなあ。@」と笑いながらgの表現に対する感想を述べてからgも笑う。このように

<sup>15</sup> 「【羊頭狗肉の語源・由来】羊頭狗肉は「羊頭を揚げて狗肉を売る」を略した四字熟語で、出典は中国宋時代の禅書『無関門(むかんもん)』。店頭の看板には「羊頭(羊の頭)」を揚げ、実際には「狗肉(犬の肉)」を売る意味が転じて、見せ掛けは立派だが実物は違うといった意味になり、ごまかしの喩えとして、羊頭狗肉は使われるようになった。」(語源由来辞典 <http://gogen-allguide.com/yo/youtoukuniku.html>)

犬の形をしたリコリスが肉または犬の肉だということに対して全員が笑うが、その後 i がそれを否定するのに対して、g と h はさらに話をエスカレートさせ、笑い続ける。

約 3 分後、④「リコリスの食感, 同定の話段」には、321g, 337i のケーキについての発話もあるが、リコリスは食感が弾力のあるグミと似ていることについて話している。この話段で「犬の肉」, 「狗肉」, 「犬」の言及表現がすべて述語的部分以外の成分で用いられていることから前より定着していると考えられる。

④ 319g-346g (40:42-41:19) 「リコリスの食感, 同定 (333h) の話段」

発話番号		g	h	i
319	g	(8.5)うーん。		
320	i			じゃあggggさん <u>犬の肉</u> に早く。
321	g	{フフ} ケーキ食べまーす。{フフ}		
322	g	(1.2)ああナイフ使っていないな。		
323	h		(1.3) <u>狗肉</u> さあ、	
324	g	//{フフ}		
325	h		// <u>グミ</u>   みたい。	
326	g	<u>狗肉</u> <u>グミ</u> なの？		
327	h		(2.1)なんかさ、	
328	h		<u>チョコ</u> にしてはさあ＝	
329	h		変な弾力// <sub>1</sub> がない？ {フフフ} <sub>1</sub>	
330	g	// <sub>1</sub> あ、@ほんとだ。 @ <sub>1</sub>		
331	g～	@なんか弾力あるね <u>この狗肉</u> 。 @		
332	h		{ハハハ}	
333	h～		もう <u>狗肉</u> 扱い@じゃんこれ。 @ // <sub>2</sub> {フッフツ} <sub>2</sub>	
334	g	// <sub>2</sub> てかもうさ、 <sub>2</sub>		
335	g～	触った方が早くない？ <u>これ</u> 。 ※g:右手でリコリスを取る		
336	h		うん。	
337	i			ケーキ食べまーす。
338	h		<u>犬</u> い、食います。	
339	i			(1.1)あ、二人 <u>犬</u> 食ってんの？
340	h		ん。	
341	g	ん？		
342	g	((g:リコリスの匂いを嗅いでいる))		
343	h		((h:噛んでいる))	
344	i			((i:ケーキを食べている))
345	g	(3.8) <u>グミ</u> 。		
346	g	<u>グミ</u> だけど＝		

320i 「じゃあ gggg さん[犬の肉]に早く。」で③の 278h で導入された「犬の肉」という言及表現を Nニの成分で繰り返して用いている。それで i が g に早くリコリスを食べるように勧めているが、g はケーキを食べると報告する。次に 323h 「(1.3)[狗肉]さあ、」で h が③の 283g で導入された「狗肉」を繰り返して N+Z の成分で用いることで、g の言及表現を認め、325h 「//[グミ]|| みたい。」で食感について話し始める。326g 「[狗肉][グミ]なの？」と 331g 「@なんか弾力あるね[この狗肉]。@」で g が「狗肉」を 2 回繰り返して笑いながら食感について発話している。それに対して h が 332h で笑って 333h 「もう[狗肉]扱い@じゃんこれ。@ //<sub>2</sub>{フッフ}||」で笑いながらメタ言語的に g と h の会話について注釈していると考えられる。つまりこれだけ g と h が「狗肉」という言及表現を用いているからその名称が決まったようなことを確認しているようである。次に 337i で i がケーキを食べることを報告するのに対して、338h 「[犬]い、食います。」で h がリコリスを「犬」で言及しながら食べることを報告する。それに対して 339i 「(1.1) あ、二人[犬]食ってんの？」で i は h が用いた言及表現を繰り返して尋ねている。このように g と h の間で「狗肉」、h と i の間で「犬」という言及表現が用いられている。

その後、アメリカ料理のほかの食べ物を食べ、⑤「リコリスの匂い、味の話段」、⑥「リコリスの味の話段」が続く。次に⑦「リコリスの質、歯応え、匂いの話段」(400g 「//[狗肉]=」と 401g 「リアルになに || これ。{フフ}」で「N+Z」の成分)と⑧「リコリスの匂い、質の話段」(422g 「でもたぶん全然関係ないと思う@けどな[この狗肉]。@」で「N+Z」の倒置の成分)で g が 1 回ずつ「狗肉」という言及表現を用いる。⑨「リコリスを食べた後のケーキの味の話段」は主にケーキについて話すが、それと比較しながら g と h が「狗肉」という言及表現を用いる。

⑨ <423i-515g (43:24-45:27) リコリスを食べた後のケーキの味の話段>

発話番号		g	h	i
423	i~			(4.8) ケーキいきなよケーキ。
424	h		よかったこれ食べた後でさ、 ※h: 左指2でケーキを指す	
425	g	//{フフフフフ}		
426	h		//@[この狗肉]  しといたら=	
427	h		もう、	
428	i			{フッ}
429	h		地獄かもしれない。@	
430	i			(1.8) {フッ} この白いの何。
431	g	歯から取@れねー。@		
432	h		でしょ？	
433	g	((g: リコリスを手取る))		
434	hi		((h: ケーキを食べている))	((i: ケーキを食べている))
435	g	(7.4) まいいや、		
436	g	[狗肉]食べきるか。		
437	g	(1.2) 普通？		
438	h		うん、	

439	i			うん。
440	h		非常に普通に感じる。	
441	g~	食べる？一口。 ※g:左手で一口のリコリスをhの方に出す		
442	h		※h:左に顔を背ける	
443	i			なんかさ、
444	i			こっちの、 ※i:フォークでリコリス？を指す
445	g	嫌われた。		
446	i			これ食べてから= #これ=リコリス？
447	i			食べるとさ、
448	i			味感じない。
449	g	{フフフ}		
450	h		//うん。	
...				
464	h		なんか、しょっ、ぱく@ない？@	
465	i			{フフ}
466	h		甘いだけどー、	
467	i			あ、でもしょっぱいかも。
468	i			でもこれのせいなのか= ※i:左指2でリコリスを指す
469	i			どうなのか、
470	h		// <sub>1,2</sub> {フフ <sub>1</sub>   フ <sub>2</sub>	
471	g	// <sub>1,2</sub> {フフフ <sub>1</sub>   フフ <sub>2</sub>		
472	h		@く、 <u>狗肉</u> 効果？@ {ハッ} ※h:左指2でリコリスを指す	
473	i			{フッ}
...				
495	g	だからすっごいまずい <u>狗肉</u> を食べてから=		
496	g	ケーキを食べさ// <sub>3</sub> せると <sub>3</sub>   =		
497	i			// <sub>3</sub> {フッ <sub>3</sub>
498	g	@そうでもないケーキがすごくおいしく感じるとか。@		
499	i			{フッ}
500	h		(1.6)なんかしょっぱいというか=	
501	h		す、すっぱいというか=	
502	h		なんかわ、わ、	
503	h		ん？うーん。	
504	g	私は <u>狗肉</u> から帰って@これない。@		
505	i			{フフフフ}

まず、424h「よかったこれ食べた後でさ、」、426h「// @この狗肉残 || しろいたら=」、427h「も



う、, 429h「地獄かもしれない。@」でリコリスをケーキの前に食べてよかったと述べるところでhが「この狗肉」(連体詞+N+Zの成分)を用いている。まだ食べ終わっていないgも436g「**狗肉**食べきるか。」で狗肉(N+Z(ヲ)の成分)を用いる。443i~448iでiはリコリスを食べたからケーキを食べるとケーキは味がしないと述べる。次に、464hでhがケーキがしょっぱいことに対する同意を要求した後、iは同意してから、468iで人差し指でリコリスを指しながらリコリスのせいの可能性に触れる。そこで472h「@く、**狗肉**効果?@ {ハッ}」でhが人差し指でリコリスを指しながら「狗肉」(述語的部分の要素)という言葉及表現を用いる。次に、495g「だからすっごいまずい**狗肉**を食べてから=」, 496g「ケーキを食べさ//<sub>3</sub>せると<sub>3</sub>||=」, 498g「@そんでもないケーキがすごくおいしく感じるとか。@」でgは「狗肉」(「Nヲ」の成分)を用いて、狗肉の効果について詳しく述べる。

⑨「リコリスを食べた後のケーキの味の話段」のすぐ後、⑩「リコリスの歯応え、味、同定の話段」が続く。529h-539h, 607i-611iでケーキについての話もあるが、iがやっとリコリスを食べ、参加者全員がリコリスの評価をする。

⑩ 516g-611i (45:28-48:09)「リコリスの歯応え、味(516g, 554i-557g, 560h-561h), 同定(575g-579g)の話段」 <529h-539h, 607i-611i ケーキ>

発話番号		g	h	i
516	g	(2.4)あたしでも <b>この狗肉</b> 別に平気だなあ。		
517	g	((g:水を飲んでいる))		
518	hi		((h:ケーキを食べている))	((i:ケーキを食べている))
519	g	(8.2)しかしなんか <b>狗肉</b> の食感でさ、		
520	g	出来の悪いハイチュウみたい。		
521	h		{フフ}	
522	i			{フッ}
523	i			(1.0){フッ}
524	ghi	((g:噛んでいる))	((h:噛んでいる))	((i:噛んでいる))
525	g	(10.3)取れない。		
526	g	((g:フォークを口の中に入れて動かしている))		
527	h		((h:水を飲んでいる))	
528	i			((i:噛んでいる))
529	h		(8.3)なんかこういうバサバサしたさー、※h:右手の指を動かしてバサバサを表す	
530	i			//うん。
531	h		//甘い  ちょっとしたケーキってさ、	
532	h		※h:両手でケーキを表す	
533	i			うん。

534	h		なんか、一つ、ずつ// <sub>1</sub> 個包 <sub>1</sub>   装になつてさ、※h:両手で個包装、バックを表す	
535	g	// <sub>1</sub> ん? <sub>1</sub>		
536	h		バックで売ってそう// <sub>2</sub> な、 <sub>2</sub>	
537	g	// <sub>2</sub> うー <sub>2</sub>   ー ん。		
538	i			ああー。
539	h		イメージが。	
540	i			これ食べるか=
541	i			しょうがない。
542	g	狗肉が取れない@ちよっちよつと。@		
543	h		{ハハ}そこで箸いくか。{ハハハ}	
544	g	((g:口の中に箸を入れて動かしている))		
545	g	(2.7)人間困ったら=		
546	g	箸だよ。		
547	h		//うん。	
548	i			//うん。
549	i			(1.6)ああ、両方で嘔むんじゃ。 {フツ} ※i:左手を口に当てのけぞる
550	h		(1.2){フフフ、ハハ、ハハ} ※h:iを見て笑っている	
551	g	{ンフフフ}		
552	h		iiiも狗肉に、{ハハ、ハハ}	
553	h		(1.0)// <sub>1</sub> 口の中が侵食されて、 <sub>1</sub>	
554	i~			// <sub>1</sub> でも味は平気だよ私 <sub>1</sub>   これ。
555	g	うん。		
556	h		// <sub>2</sub> あ本当? <sub>2</sub>	
557	g	// <sub>2</sub> 味は平気だけど <sub>2</sub>   =		
558	g	// <sub>3</sub> 取れないんだよね <sub>3</sub>		
559	i			// <sub>3</sub> うん、うん <sub>3</sub>
560	h		(1.8)あたしこれいっ、一個でいい、	
561	h~		も、もういいかな[この// <sub>4</sub> 狗肉 <sub>4</sub>    は。	
562	i			// <sub>4</sub> {フフ} <sub>4</sub>
563	g	あたし[このく]、これどこの国のか= ※g:右指2でプレートを指す		
564	g	わかったら=		
565	g~	土産で買@ってこようか //な[このク  ツッキー]、@		

566	h		//@あ本当。@	
567	h		@あたし違うものお土産にちょうだい。@ ※h:右手でgの肩に触れる	
568	g	一個は食べるんでしょ？		
569	h		(1.4)今日の一つで、	
570	h		もう私の人生は十分、	
571	g	{フフ}		
572	h		@ <u>狗肉</u> を堪能//した  と思うから、@ ※h:首を横に振る	
573	i			//{フフ}
574	h		@いいです。@	
575	g	あれもう <u>狗肉</u> なの？		
576	g	確定@なの？@		
577	h		{ハハ}	
578	h		いや愛称というか、	
579	g	@うーん。@		
580	g	((g:ペットボトルの水を注ぐ))		
581	g	(3.3)よいしょ。		
582	h		°私も水がほしい。° ※h:ペットボトルを取る	
583	g	(1.1)ねえ確かにこれは水が@いる。@		
584	i			//{フフ}
585	g	//さす  か <u>狗肉</u> 。		
586	i			{フフ}
587	g	(1.6)取れないー。		
588	h		{フフ}	
589	i			{フフ}
590	g	((g:箸を口の中に入れ動かしている))		
591	h		((h:水を飲もうとしている))	
592	i			((i:囁んでいる))
593	h		(7.7)静かに@格闘中？@	
594	i			{フフ}
595	i~			(2.5)でも味は平気だよ//あたし。
596	g		//うん。	
597	g	味は割といいかも、		
598	g	普通。		
599	i			うん。
600	g	(2.4)食感がなあ。		
601	i			ん、菌に付くのがなあ。
602	g	うん。		

603	g	((g:箸を口の中に入れ動かしている))		
604	hi		((h:水を飲んでいる))	((i:水を飲んでいる))
605	g	(9.2)きつとこれは一番虫菌が多い国の食べ物@だ。@		
606	h		{ハハハハハ}	

516g「あたしでもこの狗肉別に平気だなあ。」でgは「この狗肉」のN+Zの成分を用いて味は平気だという評価をしているが、519g「しかしなんか狗肉の食感てさ、」と520g「出来の悪いハイチュウみたい。」では「狗肉の」の連体詞を用いて食感に対して否定的な評価をする。さらに542g「狗肉が取れない@ちょっちょつと。@」で「狗肉が」(「Nガ」の成分)を用いて叫んでいる。552h「iiiも狗肉に、{ハハ、ハハ}」でhがiに向かって初めて「狗肉」という言及表現を用いてリコリスを食べるように勧める。iは味が平気であること、gは菌から取れないことを述べた後、hは560h「あたしこれいっ、一個でいい、」と述べ、561h「も、もういいかなこの//狗肉||は。」で「この狗肉は」(「Nハ」の成分)を倒置で用いる。572h「@狗肉を堪能//した||と思うから、@」と574h「@いいです。@」という文で「狗肉を」(「Nヲ」の成分)を用い、否定的な評価を下す。その後、575g「あれもう狗肉なの?」と576g「確定@なの?@」では④の333hのようなメタ言語的な発話でリコリスの名称は「狗肉」に確定したかどうかを尋ねているようである。それに対してhは笑って578h「いや愛称というか、」で「狗肉」という言及表現を冗談で用いていることが分かる。続いて菌から取れないため水があることを述べているところで、585g「//さす||が狗肉。」で「狗肉」を用いるのがこの会話で最後である。

#### 4. おわりに

本研究では未知の食べ物にどのように言及するかを考察した。参加者同士が相手の言及表現に対し、相づちを打ったり、同じ言及表現かそれに類似した言及表現を用いたりすることで同意を示すことが見られた。類似した言及表現を用いる際、未知の食べ物は何であるかの同定のほかに、特に笑いを伴う場合、言葉遊びで共感し、親近感が増すことも観察された。

図3に未知の食べ物の言及表現を受け入れる過程を示す。

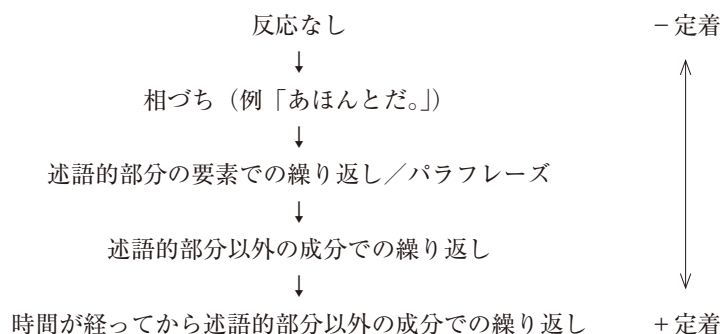


図3 未知の食べ物の言及表現を受け入れる過程

上から下にいくにつれて定着度が増える。言及表現に対して反応がない場合は、定着度が一番低い。相づちで同意を表すことで、定着度が少し増える。述語的部分の要素での繰り返し／パラフレーズすることにより言及表現が用いられることで相づちより定着度が増える。さらに述語的部分以外の成分での繰り返しがなされる場合、かなり定着していると考えられる。また、時間が経ってから述語的部分以外の成分での繰り返しがなされる場合にはその物の名称になり、一番定着していることになる。

また、本研究の分析結果から、言及表現が繰り返し用いられることで図4に示すような、未知の食べ物に対する言及表現の文構造における位置の展開モデルが考えられる。

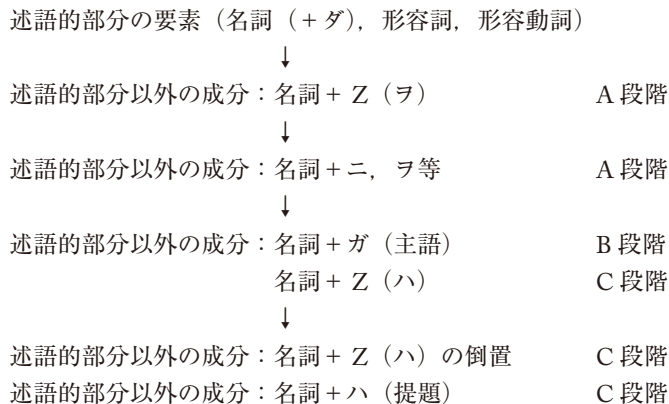


図4 未知の食べ物に対する言及表現の文構造における位置の展開モデル

言及表現が確定していない場合、述語的部分の要素として導入される。ほかの参加者が同意をし、用いられる頻度が増えると述語的部分以外の成分で用いられる。その際、A段階から始まり、次にB段階へ、最後にC段階で用いられると考えられる。A段階では名詞 + Z (ヲ) から始まり、名詞 + 格助詞ニ, ヲ等が続く。B段階では名詞 + ガ (主語) 等, そしてC段階では、名詞 + Z (ハ)、名詞 + Z (ハ) の倒置、名詞 + ハ (提題) の順で用いられると考える。しかし、このモデルは【JPN3】の言及表現のみに基づいて作ったものなので、今後ほかの会話で確認する必要がある。文は述語的部分の要素と述語的部分以外の成分から構成される (南 1974, 1993, 1997) が、言及表現は相互作用の中で文のどのような成分、要素として用いられるかについてさらに考察する必要がある。

また、本研究は【JPN3】を中心に見たが、ほかの会話での言及表現も分析する必要がある。例えば【JPN11】の30歳以上の男性3人の会話では、述語的部分以外の成分として指示代名詞 (主に倒置されていない「これZ」と倒置された「これZ」) は【JPN3】と同じくらい用いられたが、それ以外は連体詞と名詞 (「この犬は」) が1つのみであった。述語的部分の要素では、未知の食べ物の質と思いつく名称に関する表現が【JPN3】より圧倒的に多かったが、評価に関する発話は終わりに少しだけあるのみであった。今後ほかの男女、年齢等の組み合わせによる試食会の会話における相互作用で言及表現がどのように用いられるのか、言語間での比較・対照もする必要がある。

**文字化資料の表記方法** (ザトラウスキー 1993, 2000, 2005a, b, 2006, 2010a, b, 2011, 2012, 2013, Szatrowski 2010c, 2014a, b)

- 。 下降のイントネーションで文が終了することを示す。
- ? 疑問符ではなく, 上昇のイントネーションを示す。
- ↑ 発話, 文等が少しだけ上昇するイントネーションで終わることを示す。
- 発話, 文等が平板のイントネーションで終わることを示す。
- 、 文が続く可能性がある場合のごく短い沈黙を示す。
- 長音記号の前の音節が長く延ばされており, 一の数が多いほど, 長く発せられたことを示す。
- // || // と || はそれぞれ同時に発話された発話の重なった部分の始まりと終わりを示す。同時に発話された発話すべてに示すが, さらに重なった発話の // が同じ位置に来るように発話番号の大きい発話の方を右にずらすことがある。複数の重複を区別するのに下付数字 ( $//_{2,2}||$ ) を用いる。
- (0.5) ( ) 中の数字は 10 分の 1 秒単位で表示される沈黙の長さを示す。
- ( ) ( ) 中の発話が記録上不明瞭な発話を示す。
- @ @ @ と @ の間の発話が笑いながら発話されることを示す。
- ° ° ° ° の間の発話が小さな声で発話されることを示す。
- {カタカナ} { } 内のカタカナによって笑い, 咳ばらい等の音を示す。
- = ポーズがなくても字数のため改行しないとイケないことを示す。前方の発話の終わりに示す。
- 途切れた音を示す。(食べ - 食べ物)
- ~ 倒置
- ※ 発話と同時に行われる非言語行動の説明。
- # 発話の意味の説明。
- (( )) 発話間に行われる食べ物行動等に関する説明。(( )) 後の発話の頭に示す沈黙の間に起こる。
- 指 2 人差し指。

**参考文献**

- Beeman, William O. (2014) Negotiating a passage to the meal in four cultures. In: Polly Szatrowski (ed.) (2014b), 31–52.
- Burdelski, Matthew (2014) Early experiences with food: Socializing affect and relationships in Japanese. In: Polly Szatrowski (ed.) (2014b), 233–255.
- Chafe, Wallace (ed.) (1980) *The pear stories: Cognitive, cultural, and linguistic aspects of narrative production*. Norwood, NJ: Ablex Publishing Corporation.
- Clancy, Patricia (1980) Referential choice in English and Japanese narrative discourse. In: Wallace Chafe (ed.), 202–237.
- Downing, Pamela (1980) Factors influencing lexical choice in narrative. In: Wallace Chafe (ed.), 89–126.
- Heritage, John (2012) Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction* 45(1): 1–29.
- Hinds, John (1983) Topic continuity in Japanese. In: Talmy Givón (ed.) *Topic continuity in discourse: A quantitative cross-*

- language study*, 43–94. Amsterdam: John Benjamins.
- Hinds, John (1984) Topic maintenance in Japanese narratives and Japanese conversational interaction. *Discourse Processes* 7(4): 465–482.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』 東京：大修館書店。
- Karatsu, Mariko (2014) Repetition of words and phrases from the punch lines of Japanese stories about food and restaurants: A group bonding exercise. In: Polly Szatrowski (ed.) (2014b), 185–207.
- Koike, Chisato (2014) Food experiences and categorization in Japanese talk-in-interaction. In: Polly Szatrowski (ed.) (2014b), 159–183.
- Kuroshima, Satomi (2014) The structural organization of ordering and serving sushi. In: Polly Szatrowski (ed.) (2014b), 53–75.
- Labov, William & David Fanshel (1977) *Therapeutic discourse: Psychotherapy as conversation*. New York, NY: Academic Press.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 東京：大修館書店。
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 東京：大修館書店。
- 南不二男 (1997) 『現代日本語研究』 東京：三省堂。
- Noda, Mari (2014) It's delicious!: How Japanese speakers describe food at a social event. In: Polly Szatrowski (ed.) (2014b), 79–102.
- 佐久間まゆみ (2003) 「文章・談話における『段』の統括機能」佐久間まゆみ (編) 『朝倉日本語講座 7 文章・談話』 91–119. 東京：朝倉書店。
- ザトラウスキー, ポリリー (1991) 「会話における『単位』について—『話段』の提案」『日本語学』 10(10): 79–96.
- ザトラウスキー, ポリリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』 東京：くろしお出版。
- ザトラウスキー, ポリリー (2000) 「共同発話における参加者の立場と言語・非言語行動の関連について」『日本語科学』 7: 44–69.
- ザトラウスキー, ポリリー (2005a) 「談話と文体—感情評価の動的な過程について—」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子 (編) 『表現と文体』 468–480. 東京：明治書院。
- ザトラウスキー, ポリリー (2005b) 「情報処理, 相互作用, 談話構造からみた倒置と非言語行動との関係」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話』 159–208. 東京：ひつじ書房。
- ザトラウスキー, ポリリー (2006) 「20代の女性の談話における指示的な身ぶり」と拍子的な身ぶりの手の形と機能」『表現研究』 84: 67–77.
- ザトラウスキー, ポリリー (2010a) 「講義の談話の非言語行動」佐久間まゆみ (編) 『講義の表現と理解』 187–204. 東京：くろしお出版。
- ザトラウスキー, ポリリー (2010b) 「テレビの料理番組の中に見られる言語・非言語行動による評価表現」(表現学会第47回全国大会 2010.6.6 お茶の水女子大学)。
- Szatrowski, Polly (ed.) (2010c) *Storytelling across Japanese conversational genre*. Amsterdam: John Benjamins.
- ザトラウスキー, ポリリー (2011) 「試食会の言語・非言語行動について—30歳未満の女性グループを中心に」『比較日本語学教育研究センター研究年報』 7: 281–292. [http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/51870/1/39\\_281-292.pdf](http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/51870/1/39_281-292.pdf)
- ザトラウスキー, ポリリー (2012) 「日米の実際の談話に見られる人を指す身ぶり」と配慮との関係」三宅和子・野田尚史・生越直樹 (編) 『「配慮」はどのように示されるか』 235–256. 東京：ひつじ書房。
- ザトラウスキー, ポリリー (2013) 「食べ物を評価する際に用いられる『客観的表現』と『主観的表現』について」『国立国語研究所論集』 5: 95–120. <http://doi.org/10.15084/00000506>
- Szatrowski, Polly (2014a) Modality and evidentiality in Japanese and American English taster lunches: Identifying and assessing an unfamiliar drink. In: Polly Szatrowski (ed.) (2014b), 131–156.
- Szatrowski, Polly (ed.) (2014b) *Language and food: Verbal and nonverbal experiences*. Amsterdam: John Benjamins.
- ザトラウスキー, ポリリー (2014c) 「試食会における食べ物と家族との関係」『比較日本語学教育研究センター研究年報』 10: 231–238. <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/54965/1/p.231-238.pdf>
- ザトラウスキー, ポリリー (2014d) 「相互作用に見られる言語と文化の接点—ストラテジー, 談話の構成単位, モダリティとエビデンシャリティについて—」『日本言語文化研究会論集』 10: 1–17.
- ザトラウスキー, ポリリー (2015a) 「試食会におけるオノマトペ」『ヨーロッパ日本語教育 19 第18回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム 報告・発表論文集』 95–100. ヨーロッパ日本語教師学会. [http://www.eaje.eu/media/0/myfiles/12%20Panel%283%29\\_Szatrowski.pdf](http://www.eaje.eu/media/0/myfiles/12%20Panel%283%29_Szatrowski.pdf)
- ザトラウスキー, ポリリー (2015b) 「日本語の試食会におけるモダリティとエビデンシャリティの用い方—日

- 本語母語話者と非母語話者のアメリカ人との違い」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三（編）『文法・談話研究と日本語教育の接点』159–177. 東京：くろしお出版。
- 渡辺文生（2009）「英語および日本語の語りの談話文章における指示詞」『山形大学人文学部研究年報』6: 1–13.
- Watanabe, Fumio (2010) Clausal self-repetition and pre-nominal demonstratives in Japanese and English animation narratives. In: Polly Szatrowski (ed.) (2010c), 147–180.

## Referring to Unfamiliar Food: Identification and Agreement in Japanese Taster Lunches

SZATROWSKI Polly

University of Minnesota / Visiting Researcher, NINJAL [–2011.08]

### Abstract

This paper investigates how Japanese speakers refer to unfamiliar food when identifying and assessing food they are eating at a Taster Lunch. The term “referential expressions” refers to candidate names for foods and drinks and their characteristics, and includes Minami’s (1974, 1993, 1997) predicate elements (verbs, noun (+ *da* copula), adjectives, adjectival nouns) and non-predicate components (N *wa* (topic), N *ga* (subject), etc., N+other case particles, e.g., N *ni* (indirect object), N *o* (object)). The data for this study come from a videotaped corpus of 13 Taster Lunches among 3 friends of varying gender (FFF, FFM, FMM, MMM) and age (under 30, over 30) combinations (Szatrowski 2011, 2013, 2014 a, b, c, d, 2015 a, b). Questions addressed include 1) what expressions are used to refer to unfamiliar foods, 2) how are referential expressions for unfamiliar foods accepted or rejected by other participants, 3) how do negotiations of referential expressions affect interpersonal relations. People indicated unfamiliar food with both nonverbal (e.g., ellipsis, deictic gestures pointing with the hand or index finger) as well as explicit verbal referential expressions. Participants accepted one another’s referential expressions by agreeing with back channel utterances and using the same or similar referential expressions. Participants used similar referential expressions, not only to identify unfamiliar food, but also especially when accompanied by laughter to empathize with one another in word play that increased closeness. This research contributes to previous studies on referring expressions by including predicate elements and the utterances of multiple participants in the analysis.

**Key words:** referring (referential) expression, unfamiliar food, agreement, identification, sensory experience